

04 短歌に込めた家族の祈り (拉致問題)

(ナレーター) 皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。

5

北朝鮮に拉致された市川修一(いちかわ・しゅういち)さんの義理の姉・龍子(りゅうこ)さんは、拉致被害者家族の思いを短歌に詠み重ねてきました。

10

無事生還への祈り、進まぬ外交交渉へのいら立ち、老いていく父母の焦り。すべての思いを凝縮させた三十一文字です。いくつかの作品をご紹介します。

15

▼待ちわびて 届いた知らせにうち震え 父母の姿が
　(まぶた)に浮かぶ ※二度繰り返して詠む

20

修一さんは今から41年前、恋人の増元(ますもと)るみ
　子さんと「夕日を見に行く」と出かけたまま、鹿児島県の吹
　上浜(ふきあげはま)で行方不明になりました。まだ23歳
　でした。

25

平成14年の日朝首脳会談で北朝鮮が拉致を認めた時、龍
　子さんは朗報を待ちました。ところが、届いた知らせは「修
　一さんは亡くなられています」という非情なものでした。

しかし、龍子さんは発表内容のあいまいさに気づき、「弟は生きている」と確信したそうです。短歌をつづり始めたのは、「弟を助けるため、事件を風化させたくない」という思いからでした。

30

▼老いてゆく 我身（わがみ）に鞭（むち）を打ち乍（なが）がら 愛（いと）しい吾子（わがこ）を抱（いだ）く夢見
て ※二度繰り返して詠む

35

修一さんの両親は、自宅の畑で育てた無農薬野菜のジュースを飲むのが日課でした。「息子が帰るまで絶対に死ねん」という強い思いで、人一倍健康に気を使っていたのです。しかし、2人は最愛の息子との再会を果たせぬまま亡くなりました。

40

現在も、交渉は遅々として進んでいません。高齢化する拉致被害者家族にとって、残された時間は限られています。心から笑い合える日は、いつ訪れるのでしょうか。

45

▼年明けて 寂しさだけが いや増して まことの春を耐えて待つのみ ※二度繰り返して詠む